まち・ひと・しごと新聞

第３号
発行
三島信用金庫
駿東郡長泉町下土狩96－3
055-973－5730
制作
県立韮山高等学校写真報道部
県立熱海高等学校報道部
県立沼津東高等学校新聞部
日本大学三島高等学校新聞部
協力
静岡県東部地域局

わさびを、もっと、おもしろく

東部・伊豆地区の魅力を再認識することを目的とする本紙。今回は、地元の力や発想を駆使し、これから地域に新たな風を起こす企業に迫った。

発想力の『山本食品』

笑顔の山本豊さん（中央）と新聞部員

現在、静岡のわさびは世界的に評価され、注目が高まっている。そこで、わさび業界で躍動する株式会社山本食品を取り上げた。

驚く商品を

平成二十九年三月、『静岡水わさびの伝統栽培』が日本農業遺産に、翌年には世界農業遺産に認定された。

世界的に静岡のわさびが評価されたことについて、わさび商品を主に取り扱う、株式会社山本食品の代表取締役である山本豊さんに話を聞いた。

山本さんは「海外の人々は、以前はわさびのことを一括してホースラディッシュと呼び、西洋わさびと日本のわさびとの区別が出来ていなかった。しかし、最近の海外での和食ブームによって、日本のわさびが注目され、海外でも『WASABI』と呼ばれるようになった。認定を機会に、日本の代表的なハーブであるわさびを、より世界に宣伝していきたい」と話した。

四代目となる山本さんは、自社企業のコンセプトに「わさびを、もっと、おもしろく」を加えた。その理由は、世の中にないものを作り、消費者に「なるほど！」「そうきたか！」という感動を味わってもらいたいからだという。その例として『追い茎本わさび』という商品が挙げられる。これは、鮪の大トロや和牛など、脂がのった食材にもしっかりと辛味を効かせること、茎のシャキシャキとした食感を楽しむことを考えてつくられた。名前の由来は、製作の過程で茎を後から追って加えたことからきている。

このように、山本食品は商品名や味わいなどに面白さのスパイスを付け加えている。

今後の展望について、「新しい理念を基に、しっかりと歩みを進めていきたい。しかし、現在は三段跳びのホップにすぎない。より多くの人々にわさびの底抜けの可能性を知ってもらうため、あっと驚く商品の開発、PRに励んでいきたい」と山本さんは話した。

町工場と連携

山本食品はわさびの商品開発の一環として、新しいわさびおろし板「鋼鮫」を開発した。

これまで、わさびをすりおろす際には、鮫皮が一番適していると言われていた。しかし「鋼鮫」は、それ以上のすりやすさと辛味と風味を生んだ。

鋼鮫の表面には、「わさび」の三文字が一面に施されている。わさびの文字の形状で、それぞれ円を描きながら別の方向にすりおろされていく。そのため、酸素を含み、新鮮な刺激の中にクリーミーさを含んだ味わいが生まれる。漢字の「山葵」でも、カタカナの「ワサビ」でもなく、ひらがなの「わさび」だからこそ、その味を引き出すことが出来た。

「鋼鮫」は地域の町工場と連携し、文字のサイズ、配列など三百を超える調整が行われた。これは現代の町工場の技術力の結晶として、好評を得ている。さらに昨年に「わさびの文字でわさびをすりおろす」という洒落の効いたデザインが、公益財団法人日本デザイン振興会主催のグットデザイン賞を獲得した。

鋼鮫ですりおろす

山本さんは「町工場の技術力と、わさびの面白い商品を開発したいという気持ちが合致し、共同開発を開始した。デザイン面や細かい調節など、数多くの困難があったが、その分発売したときの反響がとても良く、挑戦してよかったという気持ちで一杯だ。これをきっかけに、わさび業界がさらなる発展を遂げることを願いたい」と語った。

編集後記

一面担当の日大三島高校新聞部です。最後までご覧頂きありがとうございます。面が完成したのも、各企業の方々のご尽力の賜物です。この新聞制作にあたり、商品化されるまでの苦労や農業遺産認定に至る道のりなど「辛い」話を聞きました。しかし、諦めずに努力を続けた結果、私たちだけでなく、世界にもその素晴らしい味を届けてくれました。

山本さんは「何事も興味を持って、やってみることが大切」と語ってくれました。皆さまにも本紙から諦めない気持ちを感じて頂ければ「幸い」です。

伝統の栽培方法認定

畳石式

熱く話す高村さん

「静岡水わさびの伝統栽培」に含まれる、伊豆市筏場の伝統の栽培方法である畳石式が平成三〇年三月、世界農業遺産に認定された。そこで、筏場でわさびを栽培する有限会社たか惣に取材した。

伊豆市筏場は、天城山で磨かれた湧水でわさびを栽培している。この地域の伝統栽培法である畳石式とは、地盤を深く掘り下げ、下層から上層へ向けて大きい石から順に積み上げて表面に砂礫を敷く構造だ。この栽培方法は段を重ねるごとに水をろ過することができ、水温の調整がしやすく、栄養分や酸素の供給を同時に行うことができる点が優れている。

筏場で質の良いわさびを栽培する、たか惣の代表取締役である高村範利さんは「世界農業遺産に認定されたことにより、世界に伊豆市の魅力であるわさびを発信できる。地元離れしている若者たちを呼び戻す力にもなることを期待したい」と笑顔で語った。

愛情込めて

取材と共に、我々はわさびの収穫を体験させて頂いた。

一面に広がるわさび田

わさび田には、天城山より絶え間なく流れる美しい水が引かれ、その音が大きく響いていた。上流から下流にかけて、あたり一面はわさびに覆われ、その風景も素晴らしいものだった。

わさびの収穫では、根に土が絡まっているため、冷たい水で入念に濯ぎ、不要な部分を取り除く。この時、わさびに傷が付くと商品価値が下がってしまうという。より良いわさびを消費者に届けるためには、とても慎重に作業を行う必要がある。

高村さんは、先代の「わさびは女性」という意識を受け継ぎ、出荷するまでの作業を丁寧にこなしている。傷一切なく、まごころ込めて育てられたわさびからは、天城の人々の温かい愛情を感じた。

熱海を「土台」から支える

青木建設株式会社

観光地として近年賑わいを見せる熱海。その熱海の港湾関係の公共事業を請け負っている青木建設株式会社を取材した。

自慢の仕事「サンビーチ」のイラストと佐野さん

青木建設の創業は昭和２年、建設業としての設立は昭和25年と長い歴史を持つ会社である。熱海が誇る観光名所「サンビーチ」、伊東のサンハトヤ前の海沿いバイパスは、この青木建設の手による。様々なものを建設してきた青木建設のポリシーは「確実に、丁寧に、親切に、より良い仕事をより早く」であり、これを日々心掛けている。

特徴は「地域に根ざし、地域に貢献する会社」だ。代表取締役である佐野茂樹さんと、総務部長の坂本正実さんにお話を伺った。

役に立つことの幸せ

●御社の業務のやりがいとは？

「建設業では作ったものが形として残るというのが何よりもやりがいがある。例えば観光、防災に関わるものなどは残るだけでなく、人の役にも立てる。そういった仕事ができることが何よりも幸せだ。自分の作ったものが地域の人や役に立っていると思うとやりがいを強く感じる」（佐野氏）

●御社の雰囲気は？

「依頼された業務を少しでも良いものにしようと心掛けて取り組む雰囲気がある。大きな仕事を任されているという自負があるからだろう」（佐野氏）

仕事への思いを語る佐野さん

「子どものＰＴＡ役員を務めたことがあるが、そのような地域での活動に非常に寛容な会社だ。学校に行くために休まなければならないときがあったが、会社全体が非常に協力的であった。本業以外でも地域のために働きやすいというのは、我が社ならではの特徴だと思う」（坂本氏）

●記憶に残る仕事は？

「１つは伊東のサンハトヤ前のバイパス道路を建設したこと。この道ができたことで周辺の様子が大きく変わった。もう１つは、熱海の「サンビーチ」を造成したこと。今の熱海の賑わいに貢献できているかと思うと、とてもやりがいのある仕事であった」（佐野氏）

●時には辛いことも

「業界全体が落ち込んでいるように感じると悲しくなる。なんとか元気になればと思う」（佐野氏）

地域への想い

●県東部・伊豆地域についてどう思うか

「人口の減少に歯止めがかかっていない。人はより良い環境を求めて出て行く、それはしょうがないが、では伊豆はというと美味しい食べ物や地域の特産品などが豊富にあり、それらが切磋琢磨してより良い価値を生み出そうと努力している。知恵を出し合っている様子は伊豆のポテンシャルだ。建設業界の者として、そういった努力にどう貢献できるのかを考え、伊豆の賑わいを生み出すことに協力したい」（坂本氏）

若者へ

●今時の高校生をどう見る？

「最近の高校生は非常におとなしい。あまりおとなしすぎると社会人になって大丈夫なのかな？と心配してしまう。もっといろいろな人、特に大人と話をして社会を感じてほしい。ただ一方で、今の若い人には様々なものを作り上げる創造力や発信する力には目を見張るものがあると感じる。その力が街を良くするために必ず役立つだろう。若い世代の力に大きく期待している」（佐野氏）

●これから社会に出る高校生にメッセージを

「高校生が社会への露出が多くなることで、社会の活力も上がる。外に出て発信することも必要で、もっと社会のことを勉強してほしい。学校と社会のギャップを感じ、自分の力で埋めていく努力をしてほしい」（佐野氏）

高校生に対する印象やメッセージでは、高校生が社会に出てくることを期待している、といった高校生への肯定的なものばかりであった。これから自分たちが何ができるのかを考えたいと思うと同時に、今、自分たちが動くことも大切だと応援してもらっているかのように感じた。

熱海を「おもてなし」で支える

秀花園 湯の花膳

記者の質問に熱く答える藤間さん

秀花園は昭和26年にお土産物屋として創業し、昭和42年よりおいしい海の幸をふんだんにつかった料理と、客の心に一歩踏み込む温かな接客が売りの旅館として開業した。「お客様よし、社員よし、会社よし」の三方よしが経営理念である。今回は秀花園の常務取締役である藤間崇史さんに仕事に対する思い等を伺った。

ホテルと旅館は別！

旅館とホテルは同じ宿泊業としてまとめられることがあり、我々取材班も違いをよく理解しておらず、ホテルという言葉を口にした際に藤間さんから「ホテルではなく旅館としてのプライドを持っている」と説明があった。旅館は家族のように温かい接客が最大の売りだ。実際にこの日は、クリスマスに合わせて社員がトナカイのコスプレをしており、足を踏み入れて早々楽しい気分になった。また、何度も「うちの食事はうまいよ！」と語る様子から、サービスへの自信が窺われた。

秀花園外観。目の前が海で客室からの眺望は最高

藤間さんの仕事に対する思いは強い。営業、雇用、育成を担当している藤間さんの仕事に対するやりがいは「社員がそれぞれのやりがいを見つけてくれること」と語る。社員に自主性を持たせることに腐心していると語り、社員思いの経営者という印象を強く感じた。

ポジティブ思考を

チャレンジ精神の大切さも述べられた。新規の事業を継続的に打ち出している旅館だが、やはり反対もある。だが数字などで結果をしっかり出すことで周りから理解されるようになり、それは最高だと語る。

若者に向けてのメッセージでは「不可能思考をやめること」を語られた。若者には何回もチャレンジできる特権があり、百回に一回でも成功すればそれでいい、まずやってみる、と語る。人の経験を頭ではなく、実際に動き体に仕入れることが大切だと教えてくれた。終始熱く語る藤間さんから、秀花園の勢いを感じた。

編集後記

企業の方々を取材するにあたって関係者の皆様にはとても感謝しております。伊豆、東部が今後成長するに当たり、この記事が地域の成長促進剤になれば幸いと思っております。（熱海高校報道部）

小さな部品に込める高い安全性

株式会社　イズラシ

株式会社イズラシはナットなどの自動車部品を製造している。沼津市で80年間経営してきた背景には、1個の部品に込める高い安全性があった。また福利厚生施設であるISSIC健身塾について取材した。

1939年、イズラシは田方郡戸田村（現沼津市戸田）で創業した。当初産業に必要不可欠なボルト（雄ねじ）類を製造していた。その後1958年にはナット（雌ねじ）類の製造に転換した。製造・販売している各種製品群の中でもセルフロックナットには、緩みや戻りを防ぐ工夫が施されている。自動車のサスペンションやサスペンションアームに使われるナイロンナットの溝にはナイロンが付けられていて、戻り止め機能の役割を果たす。製造工程で不具合品を仕分けるときは、1台につき複数箇所カメラが取り付けられた画像検査機で検査する。品質基準の厳しいカーメーカーに応える高品質の部品を生み出している。

良い製品は社内環境から

長年、沼津で会社を構えてきたイズラシは社員同士のつながりも強い。

その人材育成に欠かせないのが「6S活動」と呼ばれる「整理・整頓・清掃・清潔・しつけ・作法」だ。

「人間性が出る」という「清掃」は、製造過程で油汚れが出る工場内の隅々まで清掃され、本社・沼津工場・戸田工場・の清潔さを維持していた。

目標を「お客様の信頼第一にスピードと情熱を持って50億円企業に挑戦」とするイズラシ。沼津で築いてきた技術と人間性で目標に挑み続ける。

（左から）小川さん、髙田さん、河上さん

社員も地域も健康に

ISSIC健身塾

本社に隣接しているISSIC健身塾は、イズラシの福利厚生施設として作られたトレーニング施設だ。イズラシの社員はもちろんのこと、一般の会員も利用でき、休日には約80人の会員が利用している。

施設内には、持久力を高めることができる低酸素ルームや、脳を中心とした身体機能をトレーニングするマシーンが多く並び、本格的なトレーニングができる。

マシーンの一部はイズラシで製造されており、自動車部品で培われた技術が意外なところに活用されている。

▲ジムには多くのマシーンが並ぶ

地域密着型の建設会社

株式会社　大志建設

株式会社大志建設は沼津市西沢田にある、土木事業を主とする建設会社だ。「地域に必要とされる存在に」をモットーに、昭和61年から活動している。現在は「街づくりのお手伝い」をすべく地域密着型の多岐にわたる活動をしている。

地域に必要とされる存在に

大志建設はアットホームな会社だ。毎日朝礼では前日にあった感謝すべきことを思い起こし、仕事終わりには従業員皆でお菓子を食べながら談笑する。社長の杉澤教人さんは「トラブルの8割は人間関係です。従業員同士の意思疎通を図ることでより効率的に仕事ができるようにしています」と話した。

大志建設は昭和61年の創業以来「地域に必要とされる存在に」という方針の下、地元沼津市がよりよくなるように活動している。

では実際にどのようなことを行っているのか。杉澤さんは「依頼された仕事はできるだけ引き受けるようにしています。例えば以前、沼津市からイノシシの遺骸の埋葬を依頼され、担当しました。また、造園業を営んでいることもあり、千本浜の松の移植工事を依頼されたこともあります。人が敬遠するような仕事も積極的に引き受けることによって地域の皆さんと信頼関係を築けるように努力しています」と仕事内容と、地域貢献することの良さを語った。

現在、沼津市をはじめとする地方では若者の人口流出が課題だ。それに対して杉澤さんは「若者の流出は大きな問題ですが、仕方のない一面もあります。地元から出て、そこで得た知識や技術をいずれは地元に還元してほしいです」と語った。

杉澤教人さん

編集後記

私たちは沼津市をホームタウンとした企業を2社取材したが、どちらも地域と密接に関わっているということが分かった。またイズラシは世界に誇る技術を持ち、大志建設は市や住民の多くから信頼され、その信頼に応えた活動をしていることも知り、沼津市にもこのような魅力的な会社が存在することに気づいた。

若者は東京などの都会に憧れがちだ。しかし、地元にもこのような素晴らしい企業があることを知り地元に貢献すること、生活することの良さを再認識したい。様々なことを学び、地元に役立たせることも大切だ。

▲沼東新聞部　担当者

社長の信条

「地元に恩返しを」

加和太建設　河田亮一社長

加和太建設代表取締役
河田亮一社長

加和太建設株式会社は建設業の他、『大社の杜みしま』などの商業施設の運営からイベントの企画まで幅広く手掛ける。楽しさ素敵さを求め、地域の人が自分のまちを好きだと思える「世界が注目する元気なまち」づくりにこだわり、地域の活性化に貢献している。

地元の人たちが憩う『大社の杜みしま』

★会社プロフィール★
所在地 三島市　設立1946年
建設業をはじめ、『大社の杜みしま』、『道の駅伊豆ゲートウェイ函南』などを手掛けている。

★『大社の杜みしま』★
三島大社の近くで、10以上の店舗が立ち並ぶ。イベントも行われている。

アメリカで自分と向き合う

建設業に対し良いイメージを持っていなかった私は、中学卒業間際、親の建設会社を継ぐのが嫌で、やりたいことを探すため、ホームステイをしてアメリカの私立高校に入学しました。英語も話せず、滅多に電話もできず、孤独に苦しんで自分と向き合った時、友人に勧められた浅田次郎さんの『蒼穹の昴』という小説に勇気を貰いました。それから私は自分の可能性を信じ、自分が生きた証として世の中を良くしたいと思う中、一人の背中をここまで押し、ここを起点にまちおこしの一助となった手応えがあり、嬉しかったという。

大社の杜　まちおこしの起点に

今回は河田さんが『大社の杜みしま』で心が動いたお話を伺った。当初は人が少なかった『大社の杜』に人を呼ぶため、イベントを企画し、音楽の先生の田中みどりさんに演奏を依頼した。田中さんは演奏した時、とても気持ち良かったという。今では年間１００回以上も演奏会をし、今年の３月にもホールでコンサートを開く予定。「イベントに音楽があるっていいね」と、定期的にまちで音楽をやる人が増えた。大社の杜を新たな文化や情報、商売の発信地にしたいと思う中、一人の背中をここまで押し、ここを起点にまちおこしの一助となった手応えがあり、嬉しかったという。

政治家志望から経営者へ

他国の生徒が自分より自国を自慢げに語るのは、地域や学校に与えられる影響が違うからだと考えた私は、日本の教育環境を変えるため、政治家を志そうと思いました。視野を広げるためにスイスの高校に転校し、その後は一橋大学で経済学を学びました。大学卒業後に入社した大手広告会社の仕事を通じて、経営者の方々を見る中で、政治家でなくても世の中を変えられることに気づき、経営者となり世の中を良くしようと決意しました。三十歳で地元に戻った時、弊社の建設現場で働く社員の姿を見て、人知れず人のために街をつくる建設業に魅力を感じました。そこで、弊社を継ぎ、自らの経験を生かして世話になった地元を「世界が注目する元気なまち」にして恩返しをしようと決意しました。

「世界を見て経験を積む」

私は地元から出ることは悪いことではないと思います。世界の最新情報にアンテナを張り、様々な世界を見て経験を積んで、自分の世界と対比して欲しいです。そして、経験を地域で生かすことが恩返しになると思います。地元で世話になった人や場所を忘れず、地域の外にも地元にも、その輝きをもたらして欲しいと思います。

「何事も挑戦」

フジコー　宮澤俊二社長

株式会社フジコー代表取締役　宮澤俊二社長

★会社プロフィール★
所在地：三島市　設立：昭和49年6月
売上高：121億円(2017年12月)
従業員数：351人(2018年2月)
プロデュース：三島スカイウォークなど

株式会社フジコーはアミューズメント事業をはじめ、飲食業、観光スポットの『三島スカイウォーク』などを通して、地域の活性化に貢献している。

「若い人を中心に」

リスクを冒してでも、他社がしないことに挑戦できる所が、弊社の魅力だと思います。スカイウォークは、民間企業が行政との垣根を越えて実現した全国的にも珍しい事業です。企画した事業のうち、このような成功例は２、３割です。成功しても反省点はあるので、それを生かして次に繋げるようにしています。何事も挑戦してみなければ成功も良いものも掴めません。若い人を中心に、社員には積極的に挑戦するよう促しています。

三島スカイウォークは３年目を迎え、年間１００万人に来ていただいています。観光客が地域へ訪れることにより、地域貢献に繋がると考えています。また、新たにアドベンチャーコースなどの体を動かせるエリアもでき、その中にはロングジップスライドもあり、往路で大吊橋、復路で富士山と、行きと帰りで違った景色を楽しめます。

☆三島スカイウォーク
全長400メートルの日本一長い歩行者専用吊り橋。富士山や駿河湾、伊豆の山並みなどが、橋の上から一望できる。

富士山の眺望が自慢の大吊橋

編集後記

取材させていただいた企業の方々をはじめ、三島信用金庫の担当者の方々の協力を得て紙面制作ができました。この場を借りてお礼申し上げます。未熟な点も多いですが、楽しんでいただけたら幸いです。

取材の様子

韮山高校写真報道部員

【四面担当】
県立韮山高校
写真報道部